

令和 4 年 6 月 13 日現在

機関番号：32408

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2021

課題番号：19K00526

研究課題名（和文）米軍統治下におけるイメージの運動体 - ニシムイ美術村と戦後沖縄文学 -

研究課題名（英文）Nishimui: Artists' Colony and Okinawan Literature

研究代表者

本浜 秀彦（Motohama, Hidehiko）

文教大学・国際学部・教授

研究者番号：60441961

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、米軍統治下の沖縄で形成された「ニシムイ美術村」に集った画家と、「占領者」への抗いから生まれた沖縄文学の作家の作品に注目し、彼らが挑んだ表現の特徴と、絵画と文学の影響関係を探ることを通して、社会変容の中におけるイメージ生成の考察を目論んだ。戦後沖縄の美術と文学との関係を探る手掛かりとして詳細に検証したのが、雑誌の表紙と小説の「ブックカバー」であった。具体的には雑誌『新沖縄文学』の創刊時から「本土復帰」前の表紙と、芥川賞を受賞した4人の作家（大城立裕、東峰夫、又吉栄喜、目取真俊）の単行本、文庫本のブックカバーなどを詳細に分析し、文学とアートの出会う「場」を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

戦後、27年間にわたり米軍統治が行われた沖縄の文化状況は、様々な角度から研究が行われるべき課題が依然残されているが、本研究は、これまで手付かずだった「ニシムイ美術村」に集った画家たちと沖縄文学の作家たちの影響関係を、本格的に論じたきわめて斬新な研究である。また本研究を進めていく中で、文学とアートの出会う「場」としての「ブックカバー」の重要性に気付き、それを沖縄の戦後美術と文学を俎上に乗せ、ケーススタディとして詳細に分析、検証している側面は、戦後沖縄の文化状況の考察にとどまらず、文学や視覚文化の研究における新たな視点や分析手法を示しており、その点における学術的意義は少なくないと思う。

研究成果の概要（英文）： My study is to discuss the relationships between Okinawan literature and art. I doing this, I analyze book jackets and covers of Okinawan fiction. Firstly, I examine front covers of an Okinawan literary magazine and illustrations for serial novels appeared in Okinawan newspapers, by paying attention to artists at the Nishimui Art Village, an artists' colony formed in the current Shurigibo-cho, Naha, in the period of American Occupation. Young artists, who moved to there, challenged to the revival of the arts in the society after the Battle of Okinawa. Secondly, I analyze book jackets of fiction by Okinawan writers. In particular, I focus on Akutagawa Literary Prize-winning fictions by four Okinawan writers; Oshiro Tatsuhiro, Higashi Mineo, Matayoshi Eiki and Medoruma Shun. Throughout the discussion above, my study demonstrates that book jacket/cover is an important site, because where Okinawan literature, like other literature, intersects with visual culture.

研究分野：比較文学

キーワード：ニシムイ美術村 戦後沖縄文学 視覚文化 ブックカバー 装画 美術教育 アメリカニズム イメージの運動体

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

戦後、27年間にわたり米軍統治が行われた沖縄の文化状況は、様々な角度から研究が行われるべき課題が依然残されている。本研究の構想は、そうした問題意識のもと、戦後美術史の中で長く正当に評価されず、その全体像さえ最近まで明らかではなかった、戦後沖縄の若き画家たちのコミュニティである「ニシムイ美術村」に関心を持ったことから始まった。同美術村に集った画家たちの作品と、戦後の厳しい社会状況の中がつくりだされてきた小説や詩などの沖縄の文学表現との関係を探り、米軍占領下において芸術家や文学者が挑んだ表現を検証することは、社会変容の中で生成するイメージの問題に迫ることができるのではないかと考え、本研究に着手することとなった。

2. 研究の目的

本研究は、米軍占領下の沖縄で形成された「ニシムイ美術村」に集った画家や、「占領者」への抗いとして世に作品を問うた作家や詩人の作品に注目、それらの表現の特徴および絵画と文学の影響関係を探ることを通して、社会変容の中におけるイメージの生成の過程を考察することをねらいとした。

沖縄の占領政策の一環としてあった米軍の文化政策にとどまらず、文化政策担当官らの意にも知らず染みついてきたと考えられる、二十世紀的な「アメリカニズム」を研究の射程に入れつつも、それと並行して、ニシムイ美術村の画家たちが戦前に受けた美術教育の在り方にも研究対象を広げた。

沖縄の戦後文学研究は、これまで研究者によって一定の研究成果が着実に積み重ねられてきている分野とよく、例えば研究代表者が企画・編集したアンソロジー『沖縄文学選 日本文学のエッジからの問い』は、近現代の沖縄の小説、詩、戯曲などの文学表現を俯瞰できる内容になっている。しかし、作家や詩人らによる、沖縄の美術作品に関する断片的な美術評論やエッセイの類などはあるものの、戦後美術への総体的な評価は、文学側からなされたわけではない。同様に、美術側からも、戦後美術と沖縄の文学への関りについては、新聞小説に提供した挿絵などが多数あるにもかかわらず、掲載紙の調査や一部の論考を除けば、本格的な検証や考察は未だなされていない。

そのため本研究は、戦後沖縄の文学と美術の双方が交差し、検証するにふさわしい「場」を探すことにまず注力し、そこに焦点を定めて、詳細な分析を重ねていくことで、沖縄における視覚表現とことばの関係を相対的に捉えることを目論んだ。そこで注目したのが、後述するように、本の「ブックカバー」であった。

3. 研究の方法

研究期間初年度の2019年度は、勤務先大学から英国セインズベリー日本藝術研究所での在外研究の機会を得たため、ニシムイ美術村に関する調査などを沖縄で行うことはできなかったが、同研究所やイースト・アングリア大学、ケンブリッジ大学や大英博物館など、英国に滞在した利点を生かしながら、美術史、視覚文化、シュールレアリズム、二十世紀のアメリカニズムなど、本研究に関連する知識を意識的に広げた。

2020年度は、コロナ禍の中でさまざまな制限がある中、沖縄での調査・資料収集を2回行った。ここで意識したのは以下の10人の「ニシムイ美術村の画家」についての情報・資料収集である。屋部憲(1894-1952)、末吉安久(1904-81)、名渡山愛順(1906-70)、大城皓也(1911-80)、金城安太郎(1911-99)、具志堅以徳(1912-2009)、山元恵一(1913-77)、安次嶺金正(1916-93)、玉那覇正吉(1981-84)、安谷屋正義(1921-67)。

具体的には沖縄県立博物館・美術館での絵画の鑑賞、資料の収集、県立図書館での参考文献の閲覧などを行う一方、県立博物館・美術館の学芸員や、ギャラリーなどの美術関係者にヒアリングすることなどを重ねた。また戦前の沖縄の美術教育に関して、東京美術学校(現・東京藝術大学)に進んだニシムイの画家らが卒業した県立第二中学、現在的那覇高校を訪問し、同窓会や学校関係者から話を聞くとともに、資料などを入手した。

以上のような研究を進めていく中で、次第に沖縄の文学と美術が交差する「場」として、きわめて重要な意味を持つと考えられるようになったのが「ブックカバー」である。

本の装丁そのものに関する研究は、国内外ともそれなりの先行研究はあるが、「ブックカバー」に関しては少なく、とくに「デジタル時代」となり、オンライン書店での本の「顔」としての重要性も増した「ブックカバー」を、アートと文学が出会う「場」という観点から一冊の本にまとめたものは、英語圏においては米国の老舗出版社の装丁家・ディレクターのピーター・メンデルサンドと、ハーバード大学の英文学研究者デビッド・アルワースの共著である『本の顔 文学のエッジにあるブックジャケット/カバーとアート』(原題: *The Look of the Book: Jackets, Covers & Art at the Edges of Literature*)がおそらくその嚆矢だろう。同書で彼らは、「ブックカバー」は、中身である小説の前にある「顔」であり、それは小説のテキストと、視覚文化や出版ビジネスなどの文脈と交差する「場」であると同時に、そのものがアートである、と述べている。

本研究は、そうした先行研究による「ブックカバー」についての概念的な整理を、研究の理論的なフレームワークの参考にしつつ、同書でも実践された「ブックカバー」の実例の分析を行った。中でも沖縄初の芥川賞作家である大城立裕（1925-2020）の作品は、単行本化、あるいは文庫本化されたものが多いことや、ニシムイの画家たちとの交流が深かったこともあり、より詳細に検討した。

なお、「ブックカバー」は、日本語では単に「(本の)カバー」と言われることも多いが、英語では book jacket であり、その「包み紙」をはずした（あるいは「包み紙」がない）紙を綴じた本の表紙が book cover である。本研究（および次の「4 研究成果」）では、book jacket の概念と重なる「カバー」を「ブックカバー」と表記し、それをはずした本の表紙や雑誌の表紙を「表紙」と表記する。また英書を翻訳する場合、book cover が装丁やブックカバーと表紙を含めた汎用的な意味で使われている場合は、文脈に応じて「装丁」や「本の表紙」と表記した。また cover が、日本語の「カバー」のように広い意味で使われている場合は、「カバー」の表記をあてた。

4. 研究成果

本研究の研究成果の一部は、『文教大学国際学部紀要』第33巻1号に収録する「沖縄の文学と視覚文化が会う「場」としてのブックカバー デジタル時代の小説とアートの関係性を探る」で示した。

本研究においてニシムイの画家たちの文学との関わりや、沖縄の文学とアートが出会った「場」であるブックカバーの分析で明らかにしたのは主に以下のような内容である。

(1) ニシムイの画家たちと沖縄の文芸メディア

ニシムイの画家たちは、沖縄の文学と非常に密接な関係があった。そのことは沖縄県立博物館・美術館が開催した「ニシムイ～太陽のキャンパス展」の際に、綿密に調査が行われており、その結果は同展の記録集（2016）に収録された「新聞連載小説挿絵について」で確認することができる。それによると屋部と具志堅の二人を除く8人が、地元作家が手掛けた新聞小説の挿絵を描いていたのが分かる。

また彼らは雑誌『新沖縄文学』の表紙を多く手がけていた。同誌が、表紙絵や目次カット、扉カットに、積極的に地元・沖縄の美術家を起用したこともあるが、「文芸誌」の性格が色濃かった創刊号（1966）から、1972年5月の沖縄の「本土復帰」（沖縄の施政権の日本への返還）以前に出された21号までに臨時増刊号を加えた22冊に注目、表紙絵などを担当した画家・デザイナーをまとめたのが下記の一覧であるが（網掛けがニシムイの画家たち）、その活躍ぶりは際立っている。また一覧には、彼らが1950年に開学した琉球大学で教鞭をとった時の教え子である岸本一夫、翁長自修らの名前も多くあり、当時は間違いなくニシムイの画家たちと沖縄の文化はシンクロしていたと言える。

号数	発行年月日	表紙絵	目次カット	扉カット
第1号 春季特集号	1966/4/29	岸本一夫	安谷屋正義	
第2号 夏季特集号	1966/7/31	安谷屋正義	岸本一夫	安次富長昭
第3号 秋季特集号	1966/9/30	安次富長昭	翁長自修	玉那覇正吉
第4号 1967 冬季号	1967/2/5	玉那覇正吉	大嶺政寛	-
第5号 1967 春季号	1967/4/30	大城皓也	宮城健盛	島袋嘉博
第6号 1967 夏季号	1967/8/4	安次嶺金正	与儀達治	宮城健盛
第7号 1967 秋季号	1967/11/10	大嶺政寛	安次嶺金正	-
第8号 1968 冬季号	1968/2/15	宮城健盛	安次富長昭	大城皓也
第9号 1968 春季号	1968/5/31	与儀達治	大城皓也	翁長自修
第10号 1968 夏季号	1968/8/20	城間喜宏	玉那覇正吉	-
第11号 1968 秋季号	1968/10/26	安元賢治	城間喜宏	上原浩
第12号 1969 冬季号	1969/2/10	大城皓也	神山泰治	石原広一
第13号 春季号	1969/5/25	大城皓也	治谷文夫	-
第14号 夏季号	1969/8/25	大城皓也	石原広一	-
臨時増刊号	1969/11/13	安次富長昭	石原広一	-
第15号 1970	1970/1/31	大城皓也	安元賢治	-
第16号 1970 春季号	1970/4/30	玉那覇正吉	岸本一夫	-
第17号 1970 夏季号	1970/8/20	玉那覇正吉	塩田春雄	-
第18号	1970/12/10	翁長自修	稲嶺成祚	-
第19号	1971/3/20	翁長自修	山元恵一	-
第20号 創刊5周年記念号	1971/8/5	稲嶺成祚	安次富長昭	-
第21号	1971/12/20	山元恵一	岸本一夫	-

(2) ブックジャケットの実例分析

沖縄の戦後文学は、1967年に大城立裕が「カクテル・パーティー」で芥川賞を受賞したことをきっかけに注目をされるが、東京の出版社から出される単行本や文庫本には、東京で活躍して

いた画家や挿画家、デザイナーなどが起用され、ニシムイの作家たちは、単行本化（または文庫本化）された沖縄の小説のブックカバーを手掛けることはなかった（実際「カクテル・パーティー」の初出は『新沖縄文学』4号だったが、そのときのカットは沖縄の画家・城間喜宏だった）。

以下は、東京の出版社から出された戦後沖縄の小説の単行本・文庫本のブックジャケットの主な特徴である。

ケーススタディ：大城立裕作品の単行本・文庫本のブックカバーの特徴について

沖縄初の芥川賞受賞作「カクテル・パーティー」は受賞時の1967年に文芸春秋から単行本が出版されるが、下高原健二が担当した装画は、小説の内容とは関係のない、焼きものの街として知られる那覇市壺屋をイメージさせる風景に、沖縄の庶民が着た着物をまとった、行商途中のような女性が描かれたものであった。そのような「民芸的な沖縄イメージ」のブックカバーは、1987年、理論社から新たに出た単行本でも踏襲された。

ケーススタディ：ニシムイの系譜に連なる美術家の「カクテル・パーティー」の挿画

大城は、ニシムイの画家たちと交流の深かった作家でもあり、例えば山元は大城の新聞小説（「琉球処分」）の挿絵を手掛けていたが、彼らが大城のブックカバーを担当することはなかった。しかし、琉球大学で学び、教職に就いた安谷屋らから教えを受けた安次富長昭（1930-2021）の手掛けた角川文庫版の『カクテル・パーティー』は、洗練されたイメージでカクテルグラスをデザインすると同時に、偽りの国際交流を告発した小説の世界を見事に表現していた。これはブックカバーが、文学とアートの理想的な出会いの「場」となった例として指摘できる。

ケーススタディ：「カクテル・パーティー」に続く芥川賞受賞作のブックカバーの特徴

大城に続き、東峰夫「オキナワの少年」（1971）又吉栄喜「豚の報い」（1995）目取真俊「水滴」（1997）が芥川賞を受賞し、それぞれ単行本、文庫本が東京の出版社から出版される。又吉、目真作品になると、ステレオタイプ的な「民芸的な沖縄イメージ」は脱し、むしろ小説世界を映し出すような、洗練された装丁デザインになっている。けれども起用されたのは、「中央」で活躍する装丁家や画家、デザイナーであり、沖縄の画家と作家のコラボレーションのようなものはなかった。

ブックカバーが、小説のテキストと、本をめぐるさまざまなコンテクスト（文脈）の交差する「場」と見る仮説の有効性は検証できたと考える。しかし、そうであるがゆえ、近年のブックカバーの傾向から見てとれるのは、出版社のマーケティングの“論理”の中に、文学作品も決して無関係ではないという状況の中に置かれていることを、沖縄文学作品のブックカバーをめぐる上記のケーススタディを通してはからずも知ることとなった。

<引用文献>

「新聞連載小説挿絵について」沖縄県立博物館・美術館編『ニシムイ～太陽のキャンパス展』記録集（沖縄県立博物館・美術館、2016年）、128 - 129

Mendelsund, Peter and Alworth, David J. *The Look of the Book: Jackets, Covers & Art at the Edges of Literature*. New York: Ten Speed Press, 2020, 52-55.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 本浜秀彦	4. 巻 33-1
2. 論文標題 沖縄の文学と視覚文化が会おう「場」としてのブックカバー—デジタル時代の小説とアートの関係を探る	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 文教大学国際学部紀要	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------